

これまでの感染症の歴史に学ぶ

新型コロナウイルスに限らず、感染症は誰もがかかる可能性があります。感染した人が悪いわけではありません。これまでも、ハンセン病をはじめ感染症患者への差別があり、今でも続いています。その歴史から、今に生きる私たちは多くを学ぶことができます。

病原菌やウイルスに対する危機感や忌避意識

それは、目に見えないものに対する恐怖や不安、そして嫌悪感や避けたがる意識（忌避意識）を生み出す。

これまでも特定の病の患者に対する偏見や差別的な扱いがありました。

- ハンセン病患者本人やその家族に対する様々な差別
- エイズ患者・HIV感染者などに対する差別

コロナ禍における感染者やその家族、医療関係者等への差別行為

ハンセン病問題に学ぶ

ハンセン病は、感染力が弱く患者を隔離する必要のない、完治する感染症です。しかし、かつては治らない病気と恐れられました。このためハンセン病患者は誤った認識に基づき隔離され、家族も差別を受けてきた歴史があります。

ハンセン病問題と新型コロナウイルスに関する差別に共通していることは、不確かな知識から感染に対する不安や恐怖が増し、偏見や差別が広がっていったという事です。差別をしている人たちは、自分や家族が感染する恐怖心や、病気をなくすという誤った正義感から、よかれと思い行動し、知らぬうちに差別を拡大しているのです。

「ぼくは、差別を無くす行動をしたいです」

みんなの力で 久留米市内小学6年生の作文 (2020年度人権作品集より)

ニュースで毎日、新型コロナウイルスのことがあっています。ぼくも「早く収束しないかな」と思っています。新型コロナウイルスがなぜおそろしいのかぼくは考えました。新しいから薬やワクチンがなく致死率の高い事、感染力も強く広がっていくことの二つだとぼくは思います。

けれど、インフルエンザなどのように感染力が強い病気や、死んでしまう病気は他にもたくさんあります。

新型コロナウイルスが、こんなにもおそれられて、社会を暗くしているのは他にも、原因があるのではと考えました。それは、医療従事者や、感染した人への差別が

あっていることです。医療従事者の家族がうつるから来るなど言われたというニュースを聞きました。致死率や薬のことは、研究が進めば解決すると思うけれど、差別の問題は研究が進んでも解決しません。一生の事と思えます。

ぼくは、医療従事者について差別が深刻な問題だと思います。自分が感染してしまうのではないかと、思いながらかん者の治療をしているのに、差別をされることは絶対に許されたいです。

なぜ差別が起きるかというところ、自分の事しか考えていなかったり、人をおもいやったりしていないからです。「もし自分だったら」と立ち止まって考えることが必要だと思います。新型コロナウイルスへの

恐怖心は人にぶつけて無くなるものではありません。正しく知ることや、みんなで助け合うことで大きな恐怖心は小さくなるとぼくは思っています。

新型コロナウイルスはまだ無くないかもしれないかもしれません。しかし、それに対する差別はみんなの力で無くせます。だから、ぼくは差別を無くす行動をしたいです。



恐れるべきはウイルス、人じゃなかばい

差別をなくす活動

「シトラスリボンプロジェクト」

新型コロナウイルス感染症の差別、偏見を耳にした愛媛県の有志がつくったプロジェクトです。「ただいま」「おかげさまで」と言い合えるまちなら、安心して検査を受けることができ、ひいては感染拡大を防ぐことにつながります。また、感染者への差別や偏見が広がることで生まれる弊害も防ぐことができます。

ただいま、おかげさまで言いあえるまちに
みんなで広げよう、シトラスリボンプロジェクト。

